

児童が主体的にパフォーマンス課題に取り組むことができる外国語指導の在り方 —言語活動を軸とした単元計画とルーブリック評価の活用—

千葉市立幕張西小学校 教諭 椎名 瑛里奈

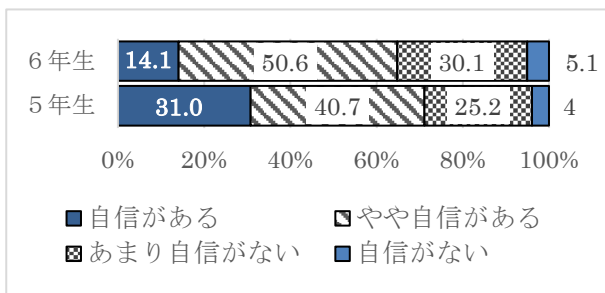
《研究の概要》

本研究の目的は、外国語科における「話す（発表）」の活動において、児童が主体的に学び、自己のパフォーマンス能力を向上させることである。「話す（発表）」の活動を充実させるために「言語活動を軸とした単元構成の立案」と「ルーブリックを用いた自己・相互評価の場面設定」の二つの視点を持ち、実践授業を行った。終末課題のスピーチにつながる言語活動を取り入れることで、原稿を作成する際の表現の幅を広げることができた。また、ルーブリックの活用によって児童がより魅力的な内容となるようにスピーチの原稿を精査したり、ジェスチャーを効果的に活用するタイミングを考えたりするなど主体的に活動する姿が見られ、「話す（発表）」の活動への意欲や自信につながっただけでなく、児童のパフォーマンス能力を高めることができた。

1 問題の所在

「千葉市学校教育の課題 21世紀を拓く」において小学校外国語・外国語活動の課題の一つに、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価の実践を通して、児童が身に付けた力を多角的に見取っていけるよう、授業や評価方法等の工夫改善に努めることが挙げられている。ルーブリックとは、パフォーマンス課題において学習における到達度を示す評価指標である。本校では昨年度より「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点から構成されるルーブリックを作成し、パフォーマンス評価を見取っている。

本校の5、6年生の児童を対象に Google Forms を活用してアンケート調査を行った（〔図1〕）。



〔図1〕パフォーマンス課題に対する調査結果

自分の考えや気持ちを話す（発表する）活動に「自信がある」「だいたい自信がある」と回答した児童は、5、6年生どちらも半数を超えていたが、回答を「自信がある」のみに絞ると6年生の割合は14.1%に留まった。したがって、特に6年生において意欲を向上さ

せるための取組が必要であると感じた。自信がもてない理由としては「発音などが間違っていたら恥ずかしいから」「緊張してしまい、大きな声で話すことができないから」などが挙げられた。また、原稿の内容を考える際に Google 翻訳などを使って、そのままの難しい文を使おうとする児童が多い。自分が知っている表現を最大限に活用し原稿を組み立てることにより、自分が話す内容が聞き手に伝わるという自信をもってパフォーマンス課題に取り組めると考えた。よって、児童が自信をもってパフォーマンスを行うための単元計画を充実させる必要があると考えた。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究の目的は、自己のパフォーマンス能力を高めようと主体的に課題に取り組む児童の姿を育むために、以下二つの視点をもって授業実践を行うものである。なお、本研究におけるパフォーマンス能力とは主に英語でスピーチを行う能力のことを指すこととする。

①視点1 言語活動を軸とした単元計画の立案

言語活動を軸とした単元計画を立て、児童がスピーチを考える際に表現の幅を広げるための手立てとする。

②視点2 ルーブリックの活用

西田ほか（2018）は、中学生を対象とした研究を行い、生徒同士で相互のパフォーマンスを評価し合う機会を設定することにより、生徒の意欲が高められたと

いう可能性を示唆している。よって、ルーブリックを用いて、ペアやグループで評価やアドバイスをする場面を設定する。

(2) 研究の方法

①今までの振り返りからの実態調査

Lesson 4 Welcome to Japan (5月)

②ルーブリックの開発

5・6年生を対象にこれまでのルーブリックを活用した実践についてのアンケートを実施し、ルーブリックの改善点を探る。

③検証授業

Lesson 10 My dream (2月)

④検証授業の分析と考察

児童の変容を、事前・事後のアンケート、振り返りの記述、行動観察（原稿を考える場面、グループでの評価）、パフォーマンスの変容（1人1台端末タブレットPC「以下ギガタブという」で記録を残す）、ALTによるルーブリックに基づいた評価による見取りから分析、考察する。

3 研究の内容

(1) 今までの振り返りからの実態調査

①授業実践

検証授業に向けての課題を見いだすため、第6学年においてLesson 4「Welcome to Japan」の授業を行った。このレッスンでは、「日本で行ったことがある場所が少ないALTの先生のために日本を紹介しよう」という場面設定の下、単元末に日本について紹介した。

内容面での充実を図る手立てとして、“We have～in Chiba.”や“It’s delicious.”など日本を紹介する際に必要な表現を活用できるようにするために、千葉県の建物や食べ物などの写真を見せながらペアで紹介し合う活動を行った。その際、発表メモ等は作成せずその場で考えながら話すように促した。この活動は単元の第3時と第4時の2回行った。[表1]の抽出児童の振り返りからは、第3時で理解したことを第4時で活かし、難しさを感じたことを乗り越える様子が見えてきた。ここから、何度も紹介し合うことによって発話の正確さを高めたり、発話量を増やしたりしたこと

がわかる。

[表1] 抽出児童の3・4校時目における振り返りの記述

児童	時	振り返りの記述
A	3	今日の学習で説明をするときはおすすめのところをいくつか言って説明すると伝わりやすいということがわかった。
	4	場所を説明するときには「in どこどこ」ということがわかった。目標で相手に聞こえる声で説明するというのも達成できた。
B	3	今日は千葉の魅力を伝えられた。次は何か一言付け加えて言いたい。
	4	今日は千葉の魅力をうまく伝えられたのと言入れられたのでよかったです。
C	3	きれいワクワクの英語の言い方が難しかった。
	4	友達と紹介し合ったときに、二言付け加えて伝えられた。

また、原稿作成の場面では、ギガタブの発表ノート上で原稿を構成できるようにした([資料1])。配布した発表ノートにはモデル文を提示した他、「何があるのか伝える」「できることを伝える」「詳しく説明する」「質問をする」などのカテゴリーに分けて様々な表現を示した。これによって児童がそれらの表現をアレンジして活用できるようにしたり、文を発表ノート上で自由に並べ替えたりして原稿を精査しやすくなるように工夫した。

<u>Welcome to Japan.</u>
<u>We have Tokyo German Village in Chiba.</u>
<u>You can see illumination.</u>
<u>It's Ver y beautifiul.</u>
<u>Do you want to see illumination?</u>
<u>Please visit Tokyo German Village!</u>

[資料1] 児童がギガタブ上で作成した原稿

ルーブリック([表2])は昨年度使用したものをベースに児童に提示した。

最初に教師のパフォーマンスをクラス全員で評価した。それぞれ三つの観点で、「5点」「3点」「1点」のどこに当てはまると思うのかを挙手で確認した。その際に、その点数を選んだ理由を児童に尋ねたり、教師が実際に意図したレベル(点数)などを示したりして、評価する際のポイントを伝えた。次に、児童はペア同士でルーブリックを用いて評価を行った。また、評価を行うだけでなく、互いに気が付いたことを言ったり、よかった点を伝えたりするように促した。

[表2] Lesson 4で使用したルーブリック

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
評価のポイント	正しく話せているかな？	日本のみりよくが伝わるように内容を考えて話しているかな？	聞き手のことを考えて話しているかな？	
評価の観点	5点	・これまでに習った表現を正しく使って、自分のことを話している。 (間違いないか所までOK)	・学習した表現などを使い、構成を考えて聞き手に伝わりやすいように話している。	・アイコンタクトを十分にとっている。 ・聞き取りやすい声の大きさである。
	3点	・これまでに習った表現に2~3か所の間違いはあるが、相手には十分伝わる程度に話している。	・少し伝わりにくい場面はあったが、だいたいい学習した表現などを使い、分かりやすく話している。	・時々アイコンタクトをとることができる。 ・時々声が聞き取りにくい時がある。
	1点	・これまでに習った表現に間違いがあり、伝わりにくいところがある。	・学習した表現などを使って分かりやすく話すことはまだむずかしい。	・アイコンタクトをとったり、聞き取りやすい声で話すことはまだ難しい。
がんばりポイント+1点	・英語らしい発音で、文のつながりを意識して話している。	・強調するところではゆっくり話すなど、話すテンポに変化をつけている。	・ジェスチャーを2回以上入れている。	

②今後の課題の考察

原稿を作成する際にギガタブを活用したことによって、英語で文を構成するのが苦手な児童でも意欲的に作成する姿が見られた。また、今まではGoogle 翻訳などで出てきた英文をそのまま使おうとする児童が多かったが、発表ノートに載せた表現を活用して文を作成する児童が増えた。しかし、ギガタブの操作に時間を大幅に割いてしまう児童もいたことから検証授業では違う形で補助的に活用したいと考えた。また、ペアやグループでのルーブリックを用いた評価を行う場面では、戸惑う様子の児童が多く見られた。他の人の発表の内容が理解できずに「よかったと思う。」といった漠然とした感想のみ伝える場面も見受けられた。授業実践において、ルーブリックを用いた評価の仕方や児童が目指す姿をより明確にしやすくなるように工夫改善する必要があると考える。

(2) ルーブリックの開発

①2022 年度の実践

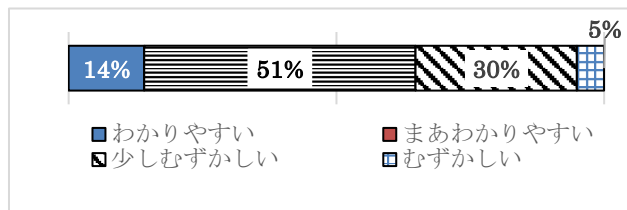
ルーブリックにおける観点は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」としていた。一般的に使用されているルーブリックは各観点評価がABCで示されていることが多い。自作のルーブリックにおける観点別評価は5、3、1点の点数で付ける。また観点毎に更に意識して取り組むことで獲得できる「がんばりポイント」を設けていた。児童は各観点の点数を合計することで、自分のランク(S・A・B・C)を知ることができる。ランク毎に励ましのコメントを付け、児童の自信につながるように工夫した。

ルーブリックは児童に事前に提示するが、これを使用して評価を行うのは教師のみであった。

②ルーブリックに関するアンケート

6年生を対象に昨年の実践も含め4回、ルーブリックを活用したパフォーマンス評価を行った(2023年11月現在)ところで、ルーブリックに関するアンケートを実施した。内容は以下のアからエの4項目である。

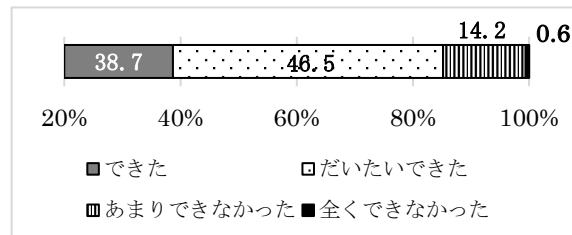
ア ルーブリックの内容のわかりやすさ



[図2] 「ルーブリックの内容のわかりやすさ」に関する結果

ルーブリック中での説明が「わかりやすい」と回答している児童が5割を超えていた。ただし、「少し難しい」や「難しい」と回答する児童もいたことから、より簡潔に書く必要があることがわかった。

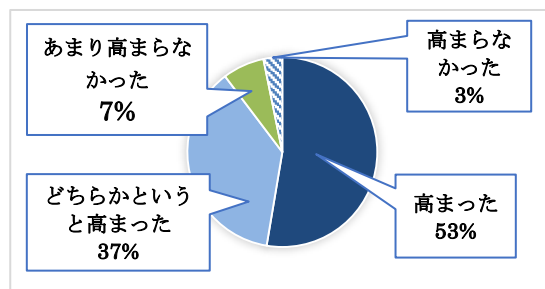
イ ルーブリックを意識して取り組めたか



[図3] 「ルーブリックを意識して取り組めたか」の結果

8割を超える児童がルーブリックによって自分が目指す姿を明確にすることが「できた」または「だいたいできた」と回答している。このことから、ルーブリックを事前に提示し、パフォーマンス課題に向けて準備を行うことは有効であると考えられる。

ウ 「がんばりポイント」は有効であるかどうか



[図4] 「がんばりポイントが有効であるか」の結果

がんばりポイントによって頑張ろうとする意欲を「もてた」「だいたいもてた」と回答した児童が合わせて90%と高い数値であった。がんばりポイントを設定することで学習への意欲が向上することが明確になったため、今後も「がんばりポイント」を活用することとする。

エ 自由記述

<p>【よいと思う点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルーブリックがあると具体的でわかりやすい。 ・ポイントやランクがあるところがよい。 ・Cランクでもほめてくれるのがうれしい。 ・自分の改善点がわかる。 <p>【改善すべき点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もっと具体的に発表例を示してほしい。 ・がんばりポイントを増やしてほしい。 ・内容を考える時間がもっとほしい。 ・もう少し詳しく改善点がわかるようにしてほしい。 ・字が多すぎてわかりにくい。 ・目標の姿が想像しづらい。

【資料2】ルーブリックに関する自由記述

自由記述（〔資料2〕）でルーブリックに対して肯定的な意見がある一方で、改善すべき点も挙げられた。誰もが自分の目指すべき姿を明確にできるルーブリックを作成する必要があると考える。

(3) 検証授業

第6学年166名を対象にLesson 10「I have a dream.」で検証授業を行った。この単元の終末課題は「10年後の自分へのビデオメッセージを送ろう」という場面設定を行い、自分の将来の夢についてスピーチを行うことである。以下のように指導計画を立て（〔表3〕）、二つの視点をもって授業実践を行った。

〔表3〕Lesson 10「I have a dream.」指導計画

時	主な学習内容	Small Talkのテーマ	ビデオ撮影の内容
1	・様々な職業名を学ぶ。	人気の職業は何？	
2	・自分の就きたい職業を伝える表現を学ぶ。	自由時間にするのが好きなことは何？	自分の将来就きたい職業は何かを話す。
3	・ある職業に就きたい理由を考え、グループの人に職業を予想する。	得意なことは何？	
4	・自分が就きたい職業とその理由を話		自分の将来就きたい職業と

	す。 ・スピーチで目指したい姿を考えて、ルーブリックを作成する。		その理由を一つ加えて話す。
5	・ルーブリックの提示とアンケート調査を行う。 ・原稿作成	これから先やってみたいことは何？	自分の将来就きたい職業とその理由を一つ以上加えて話す。
6	・ルーブリックの修正案を提示する。 ・原稿作成		
7	・グループで互いのスピーチを評価し合う。		グループ内発表の様子を撮影する。
8	・自分の夢についてのスピーチ発表会を行う。		発表会当日の映像を記録として残す。

①視点1 言語活動を軸とした単元計画の立案

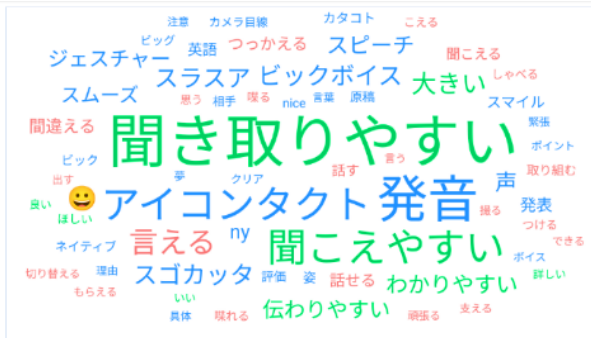
Lesson 4での実態調査において、千葉県について紹介する際に何度も紹介し合う中で発話の正確さを高めたり、発話量を増やしたりしたことから、Lesson10では原稿を作成し始める前の授業においてSmall Talkを帯取り活動として取り入れ、単元末でスピーチに向けて自分で活用できる表現の幅を広げることとした。また、様々な職業のイラストが描かれたカードを使用し、その職業になりたい理由をグループで考える活動を取り入れた。これによって、友達の発言を聞き、「そんな言い方もあるんだ!」といったような気付きを促したいと考えた。

②視点2 ルーブリックの活用

ア ルーブリックの開発

より分かりやすいルーブリックを作成するためにまず、観点を「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」から「正確さ」「内容の工夫」「伝えようとする気持ち」と変更した。また、児童が意欲的に取り組める課題となるよう、ルーブリックを児童と共に作成することとした。児童にスピーチで目指したい姿、または評価してほしい点についてアンケートを取り、結果をAIテキストマイニングでまとめた（〔資料3〕）。AIテキストマイニングでは多くの児童が書いているキーワードがより大きく表示される。児童にこの結果（〔資料3〕）を提示し、従来評価して

きた「聞き取りやすさ」「アイコンタクト」に加え「正しい発音、ネイティブのような発音」「すらすらと」が挙がっていること、「伝わりやすさ」というキーワードから内容の構成に気を付けて話したいと考えている児童が多いことを確認した。



【資料3】児童が目指したい姿についてのアンケート結果

次にこの結果を踏まえたルーブリックを示した。ルーブリックの「正確さ」の最高基準を「正しい文や発音で、自然なスピードですらすらと話す」とした。またその観点の「がんばりポイント」として「英語らしい発音に気を付けて話している」とした。「伝わりやすい」は内容のわかりやすさや聞き手が興味をもてるような内容にすることと解釈し、これを観点の「内容の工夫」とし5点の基準を「話す順番を考え、聞き手に質問している」とした。また、がんばりポイントは「理由を二文で話している」とし、基準をより明確な文で表した。

【表4】Lesson10で使用したルーブリック

観点	正確さ	内容の工夫	伝えようとする気持ち
	ただしく話しているかな？	聞き手に伝わりやすくなるように内容を考えて話しているかな？	聞き手にわかりやすく伝えようとしているかな？
ポイント	() 正しい言葉や文をつかって話している。 () 話すスピード () 正しい発音	() 将来の夢は何か () 理由の分かりやすさ () 聞いている人の反応を見ながら話している	() 声の大きさ () 声の聞き取りやすさ () アイコンタクト () ジェスチャー
評価の観点	5点	これまでに習った表現を正しく使って*、自然なスピードですらすらと話している。 ※間違え1か所までOK ※発音の正確さもふくむ	将来の夢について、伝わりやすいように話す順番を工夫して話し、聞き手に対しても質問などをしている。
	3点	これまでに習った表現に2〜3か所の間違いがあるが、自然なスピードですらすらと話している。 または 時々止まってしまったり、話すスピードが速すぎたりする。	将来の夢について、その理由を挙げて話している。
	1点	これまでに習った表現を使って相手に伝わるように話すことや、テンポがよく話すことがまだ難しい。	将来の夢について話しているが、その理由については話していない。
がんばりポイント +1点	英語らしい発音に気を付けている。	将来の夢についての理由を2文以上で話している。	ジェスチャーを2回以上入れて話している。

ルーブリックを提示した上で更に改善する点はあ

るかアンケートを再度実施したところ、「内容の工夫」の観点において、5点の基準である「将来の夢について話す順番を考え、聞き手に質問をしている」について、「質問だけでなく、聞き手に向けての一言も含めてほしい」との意見があった。そこで、「質問などをしてほしい」と修正し、児童に「私のお店に来てね。」など聞き手に対する質問以外のコメントでもよいことを児童に伝え、ルーブリックを修正した（[表4]）。

イ 自己のパフォーマンスを客観的に振り返る工夫

自己の発話やスピーチ内容について客観的に振り返り、より内容を精査するなど主体的にパフォーマンス課題に取り組む姿を育成することをねらいとし、授業ごとにギガタブで自己のスピーチを記録した。

ウ ペアやグループでの相互評価の場面設定

Lesson 4において戸惑う児童の姿が多かったことから、相互評価用にルーブリックを配布し、3〜4人のグループで互いのスピーチを評価し合った。また、評価するだけでなく、その下にコメント欄を設けてグループのメンバーが感想やアドバイスを記入した。児童は評価やコメント欄を参考にして、スピーチ発表会までに頑張りたいことについて記入した（[表5]）。

【表5】相互評価で使用したワークシートからの抜粋

児童	グループのメンバーからのコメント	スピーチに向けて自分が頑張りたいこと
A	はっきりとすらすらと話せていたので聞き取りやすかったです。すごい！	アイコンタクトができなから意識して発表したいです。
B	相手の方を見ながら言っていて良かったです。発音が良くて聞き取りやすかったです。	ジェスチャーをいれたいです。

(4) 児童の変容と考察

①視点1 言語活動を軸とした単元計画の立案

Small talkにおいて、I like の他 I'm good at や I want to の表現を意識的に活用したことにより、将来の夢についてスピーチを考えた際に、“I like soccer. I'm good at shooting.” などのように活用する児童の姿が見られた。また、即興で自分の夢について話す活動を行ったため、原稿作成の際に Google 翻訳等で調べた表現をそのまま使うのではなく、自分が活用できる表現と自分が使いたい単語とを組み合わせ

てスピーチ原稿を考えようとする姿が見られた。

②視点2 ルーブリックの活用

ア ルーブリックの開発

ルーブリックを児童と共に作成するプロセスを通して、教師の考える「目指してほしい姿」と児童が考える「目指したい姿」を一致させることができたと考える。その結果、何度も原稿を練り直そうとする姿が見られた（[資料4]）。

- ・もう少し理由を増やしたいです。
- ・やっぱり質問も加えてもいいですか？
- ・「お金を稼ぎたい」を最初の理由にしていたんですが、「サッカーが好きだから」を最初の理由にしようと思います。

[資料4] 原稿作成の際の児童の発言

イ 自己のパフォーマンスを客観的に振り返る工夫

ギガタブに撮影する際には、特に発音やすらすらと話すことに注意して撮影する姿が見受けられた。一度録画したものを見返し、もう一度撮影し直す等、よりよいパフォーマンスを記録として残そうとしていた。

ウ ペアやグループでの相互評価の場面設定

ルーブリックを用いて互いのスピーチを評価し合う活動によって「自分が目指す姿を達成するためのポイント」を可視化することができたと考える。また、グループ発表会の後でジェスチャーを新たに付け足して話す練習を行う姿も見られた。

エ ルーブリック評価における得点の実際

[表6] ALTによるルーブリックに基づく評価・得点の割合

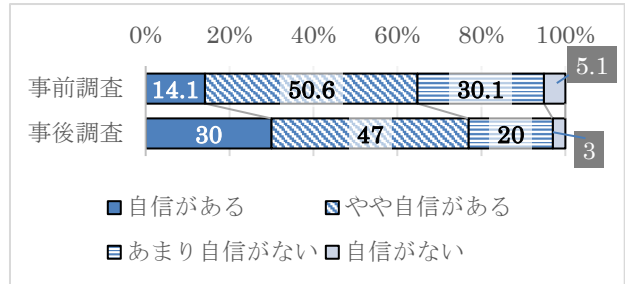
点数	正確さ		内容の工夫		伝えようとする気持ち	
	L4	L10	L4	L10	L4	L10
6点	16%	55%↑	10%	43%↑	13%	9%↓
5点	76%	17%↓	40%	32%↓	35%	35%→
4点	0%	7%↑	0%	3%↑	3%	6%↑
3点	8%	19%↑	48%	21%↓	48%	47%↓
2点	0%	1%→	0%	0%→	0%	0%→
1点	0%	0%→	1%	2%↑	1%	3%↑

Lesson4 と Lesson10 の ALT によるルーブリックに基づいた評価を比較したところ（[表6]）、「正確さ」と「内容の工夫」において6点を獲得する児童の数が大幅に向上したことがわかる。がんばりポイント（6点、4点、2点の得点）を獲得している児童の割合も上記二つの観点において増加した。しかしながら、「伝えようとする気持ち」においては6点を獲得する児童

はわずかながらも減少し、「がんばりポイント」を獲得した児童の割合も2%減少した。

③アンケート調査から見える変化

パフォーマンス課題に自信をもって取り組んでいるか再度アンケート（[図5]）を取ったところ、「自信がある」と回答した児童の数が15.9パーセント増加した。よって、今回の取組によって児童の自信につながることができたと考える。



[図5] パフォーマンス課題に対する調査結果その2

4 研究のまとめ

(1) 成果

言語活動を軸とした単元計画により児童の表現の幅を広げることができた。また、ルーブリック評価を用いることにより意欲を高めることができた。これら二つの工夫により児童の外国語のパフォーマンス活動に対する自信を高めることができた。

(2) 課題

児童のパフォーマンス課題に対する自信を高めることはできたが、ルーブリックにおいて得点の伸びが芳しくなかった「伝えようとする気持ち」の観点での得点率を向上させていく取組の手立てを模索していきたい。

【主な引用／参考文献等】

- ・千葉市教育委員会学校教育部『令和4年度千葉市学校教育の課題 21世紀を拓く』2022
- ・文部科学省「小学校指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編」2018
- ・国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』2020
- ・西田寛子・久我直人『自己調整学習の理論に基づいた「生徒の自律的な学び」を生み出す英語科学習指導プログラムの開発とその効果』2018